

---

# 自由学園～少女の青春録～

黒狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自由学園く少年少女の青春録く

### 【Nコード】

N4987X

### 【作者名】

黒狼

### 【あらすじ】

世界に裏切られてしまった優しい少女達が、新たな世界で大切な者達と共に過ごしていく物語……………。

なんかシリアスな雰囲気満点ですが、これは基本ほのぼの&ギャグがメインです！！

この作品ではキャラ設定が原作と大きく変更されていたり、最強チート化されていたりしていますので、お気に召さない方は御退室ください。

これは作者の初投稿の連載小説ですので、投稿不定期で駄文かつ

展開がムチャクチャになったりするかもしれませんが、温かい目で読んでもらえるとう幸いです!!

注意書きが長くなってしまいました。では、スタートです!!!

## プロローグ（前書き）

どうも初めまして。黒狼です。

多重クロスオーバーの学園物語は色々な方が執筆していらっしやるので、初心者で連載小説の投稿は初めてな私が書くのはどうかと思いましたが、執筆を決意しました！これから先、不満も出てくると思いますがご容赦願います！

では、どうぞー！！

## プロローグ

辺りを炎が包んでいた……………。

まるで地獄であるかのような激しい炎が……………辺りを包んでいた……………。

「……………う……………う……………。」

そこに1人の少女が倒れていた。白を基調としていたはずの服はすでに真っ赤に染まってしまっている……………。

そして彼女の前には彼女にとって大切な2人の親友が倒れていた……………。

だが2人共ぐったりとして動かない……………。

少女は激しい痛みと深い絶望感に襲われながらも口を開いた……………。

「……どう……して？……なんで……こんな……。」

尋ねる相手は目の前にいる人間達……いや……人間と呼ぶにはあまりにも不気味な格好をしていた。

黒と白を縦で半分に色分けされた仮面、真っ黒なロングコート……そして、袖口から出た鉤爪のような刃物……。まさに”恐怖の象徴”と言つに相応しい姿だった……。

するとその”恐怖の象徴”である1人が少女に答える。

「お前たちは、この世界にはもう必要ない……それだけのことだ……。」

「……そ……そんな……。」

そして少女の意識が薄れ始める……。

(……………こんなので終わっちゃうの……………そんなの……………やだ……………や  
だよ……………。)

少女はついに意識を失い、彼女たちは燃え盛る炎に包まれた……………

……………はずだった……………

……………これが新たな始まりとも知らずに……………

END

## プロローグ（後書き）

読んで下さった皆さん、本当にありがとうございます！

いきなり初めからシリアスになってしまいました。私シリアスは嫌いなのですがまだしばらくシリアスな雰囲気が続くと思います。

次から主人公である彼らが出ます！ ではまた次回！



119番は時と場合に応じて通報しろ!! (前書き)

今回から主人公登場!!

いきなり若干キャラが変わってる気もしますが……。

あと今回からOPとEDを加えたいと思います!

まだシリアスな雰囲気は続きそうなので、しばらくは御覧の曲で送りたいと思います!

OP 「PSI・Missing」

〜川田まみ〜

(とある魔術の禁書目録

OP1)

ED 「silent bible」

〜水樹奈々〜

(魔法少女リリカルなのはAs・portable OP)

曲のわからない方はYouTubeなどで検索してみてください。

では、本編をどうぞ!!



## 119番は時と場合に応じて通報しろ!!

東京都特別行政自治区

学園都市

ここは政府に公認された特別教育研究機関である。半径十数キロにわたる広大な土地の中には、都心と肩を並べられるほどの高層ビルが立ち並んでおり、そのほとんどのビルは日本を牽引する最先端の研究機関が所有している。そしてここで開発された技術を駆使した最新のシステムなどを用いて都市全体を統括する。……そう、ここは最早“教育と研究に特化した未来都市”なのである。

そして先に述べたようにけこ学園都市は教育を主軸の一つとしているため学校が多数存在し、その人口の約8割が当然学生となっている。

そして現在午後9時……

人通りの少ない通りを3人の男子学生が歩いていった。

???「はあ……不幸だ……。」

この見るからに不幸オーラを放っている黒髪ツンツン頭の学生の名は上条当麻。

見ての通り、不幸が売りの学生<sup>バカ</sup>である。

当麻「おい！！ 学生と書いてバカと読むなよ！！ 私上条当麻は好きでバカになった訳じゃないんですよ！！」

……地の文に突っ込まないでください、上条さん……。

当麻「バカ呼ばわりされて突っ込まない訳あるか！」

???「当麻、さっきから誰に文句言ってるの………。」

当麻の様子を見ながら苦笑気味に言うこの学生は奴良<sup>いぬ</sup>リクオ。茶色の髪を少し逆立てメガネを掛けている温厚そうな少年である。

当麻「何！？ この俺とリクオに対する扱いの差は！？ なんかし  
た！？ 俺なんかしたの！？」

諦めてください！ それがあなたの宿命でありポジションです！！

当麻「何でだ ……！！???つつか、開き直るな ……！！」

リクオ「ダメだ……… よくわかんないけど当麻が壊れちゃったよ………。」

???「ほっとけ、リクオ。当麻がああなのはいつものことだろ。」

リクオにそう言つこの学生は黒崎一護。オレンジの当麻より短いツンツン髪で、やや目付きの悪い少年である……………ぶっちゃけ見た目は不良。

一護「うるせえ!! この髪の色は生まれつきだ!! それに目付きも悪くねーよ!!」

リクオ「一護まで壊れた!？」

はいはい、すみませんね。莓さん。

莓「俺は莓じゃねえ!! 一護だ!!!! わざとだろてめえ!! 絶対わざとだろ!! セリフのところの俺の表記まで“莓”って書いてる時点で明らかに確信犯だろ!! 上等だ!! 今すぐ俺が叩き切つてやる!!」

リクオ「ちょっと!?! 当麻も一護も誰に怒ってるんだよ!?! ああ、もう!! 誰か止めて!!」

リクオ君……………頑張れ（他人事だけどねwww）！！

### 数分後

リクオ「はあ……………2人共いい加減落ち着いた？」

当麻・一護「ああ、悪い……………」

リクオがため息を吐きながら先頭を歩き、その後ろを当麻と一護が申し訳なさそうな様子で歩いているという状況になっていた。

そして当麻と一護は数分前のリクオを思い浮かべ、2人揃ってこ  
う思った。

当麻・一護（やっぱり怒った時のリクオは恐え……………）

リクオ「なんか言った？」

当麻・一護「いや、何でもない（何でもねえ）……………」

普通の笑顔で聞いてくるリクオに当麻と一護はある種の脅威を感じ、  
そう答えた。

ちなみに2人が今リクオを恐れているのには、リクオのある秘密に  
関係するのだが、それには今は触れないでおく。

リクオ「それにしても当麻の不幸体質ってある意味で凄いやね……。

」

一護「朝登校してたら風で転がってきた空き缶を踏んで後ろに転ん  
で、その拍子に手放しちまったカバンが走ってたトラックの荷台の  
上に乗ったかと思ったら、そのトラックが爆弾で爆破されて容疑  
者の1人として疑われ、その事情聴取で当然今日の始業式にも出ら  
れず、その上やってきた春休みの課題は爆発で灰になっちまったか  
ら提出できずに放課後から夜8時半まで補習を受けることに……  
……って、お前本当どこまで不幸なんだよ……。」

当麻「か、返す言葉もありません……。」

リクオ「まあまあ、一護落ち着いてよ……。でも僕たちももう高校  
2年か……。」

当麻「そういえばそうだな。去年は恐ろしいほど平和だったから、  
あっという間に感じるのかもな……。」

一護「ああ、そうだな……俺たちは……っ!？」

当麻・リクオ「っ!？」

その時だった。突如近くの暗い路地裏から目映しすぎるほどの明るい光が漏れだしたのだ。

当麻「なんだ!？ あの光は!？」

そしてしばらくするとその光は少しずつ弱まり始めてきた。

一護「…行ってみるぞ!！」

当麻「ああ!！」

リクオ「えっ!？ 当麻、一護、ちょっと待ってよ!！」

一護達は路地裏へと入って行き、光のある方へと進んでいく。しばらくして一護達が見つけたのは……

当麻「……光の…球…?」



そう、まさに光り輝く球体だった。青白い光を放つそれはどこか幻想的に思わせる。

そして当麻が近づこうと一歩踏み出した瞬間、光が突然強くなった。

当麻「うわっ!?!」

一護「くっ!?!」

リクオ「眩しい!?!」

あまりの眩しさに一護達は目を瞑ったが、やがてその眩しさも和らぎ始め、ついに消え失せた。そして彼らが目を再び開けて見ると……。

当麻・一護「なっ!?!」

リクオ「お、女の子!?!」

そう、そこには一護達と同じくらいの年の3人の少女が倒れていた。そして彼女たちへと近づいた瞬間、その状態を見て一護達の顔が一層険しくなる。

一護「おい！ こいつら怪我してるぞ！ それもかなり酷えー！  
このままだと命に関わるかもしれねえぞー！！」

当麻「なっ！？ じゃあ、早くこの3人を病院に「それはダメだよ、  
当麻。」…っ！？何でだよ、リクオ！！ このままじゃ……。」

リクオ「考えてみてよ、当麻。さっきみたいない出来事後に現れた、  
この素性の全くわからない人達を病院に連れていくのはまずいし…  
…それに……当麻だってこの学園都市の裏を知ってるでしょ……。」

当麻「それは……けど、じゃあこの三人を放っておくつもりかよ  
！！」

リクオの言葉に当麻は言葉を詰まらせつつも反論した。すると、

一護「俺が治療する。」

当麻「一護！？ でもお前そっちは苦手なんじゃ……。」

一護「そうも言われてられねえだろ！ こいつらの怪我は一刻を争う  
し、それにリクオの言うことも確かだ。なら、方法はそれしかねえ  
……こっからなら俺達の寮も近いな……。当麻はそいつを、リク

才はそつちの奴を運んでくれ！　くれぐれも慎重になー！！」

当麻・リクオ「ああ（うん）ー！！」

今ここに、出会わずのない少年と少女が邂逅を果たした

119番は時と場合に応じて通報しろ!! (後書き)

読者の皆さん、どうも!

黒狼です!

今回主人公を出しました!

上条さんはともかく、一護とリクオを主人公にしたのを意外に思う人は多いと思いますが、主人公キャラの中ではこの2人は結構好きだったので、主人公3人にさせていただきました。まあ、ヒロインが3人ですしね……。

あ、一護と当麻は原作では2人とももう高1なので問題ないですが、リクオは原作だとまだ中1なんですよね……。ですから1人だけ原作と背の高さがかなり違ってます。まあ、その辺に関してはいづれキャラ紹介で書きたいと思います!!

ではまた次回!!

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだね、いやマジで！（前  
ほのぼの&ギャグがメインなのでサブタイトルを「銀魂」風にした  
のに、全然本文とマッチしてない……。

そしてなんか前話よりグダグダな感じになってきた気もしてきました……。

では、本編どうぞ！

最後にあいつが登場します！！

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだよね、いやマジで！

???「……うつ……あれ……。」

目を覚ました少女が最初に見たのは、知らない天井だった。彼女は自分が布団に寝かされていることに気付くと、栗色の長い綺麗な髪を僅かに揺らしながら、ゆっくり体を起こした。

???「……私……生きてるの?……。」

少女はそう呟くと、すぐに辺りを見回す。すると隣に彼女の大切な友人達が同様に寝かされていた。

???「っ！ フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

少女はその友人2人の名前を呼んだ。すると、

???「……うつ……な、なのは……?」

金色の長い髪の少女が目を覚まし、目の前にいる少女の名前を呟いた。すると、その栗色の髪の少女 なのはは、

なのは「フェイトちゃん!!」

目に涙を浮かべ、金色の髪の少女　フェイトに抱きついた。

なのは「良かった……良かったよ……」。

フェイト「……うん……なのはも無事だったんだね……良かった……」

対するフェイトもなのはと同様に涙を浮かべ、親友の無事に安堵していた。すると、

???「……ん……あれ……ここは……どこや……?」

なのは・フェイト「っ!　はやて(ちゃん)!!」

もう1人の少女も目を覚まし、それに気付いたなのはとフェイトは彼女の名を呼んだ。

???「っ!　なのはちゃん!　フェイトちゃん!」

すると、その茶色いショートカットの髪の少女　はやては2人の

親友の姿を見て、2人と同様に目に涙を溜めながら抱きついた。

はやて「良かった……ホンマに……2人がいなくなったら、私は……。」

なのは「大丈夫だよ、はやてちゃん……。」

フェイト「私もなのはもちゃんというよ、はやて。」

そしてしばらくそれぞれの無事を喜び合っていると、

はやて「ところで、なのはちゃん、フェイトちゃん。ここは一体どこなんや?」

なのは「わからない。私も気が付いたら、ここに寝かされてたから……。」

フェイト「見た目は普通の家の部屋……だよな。」

なのは「でも、どうして私達こんなところにいるの? 私たちは……」

だが、なのはは突然顔を青くさせ震えだした。それを見たフェイト



はなのはの背中をさする。

フェイト「なのは……思い出さない方がいいよ……。」

はやて「せやな……その方がええ……。」

しかしそう言うフェイトはやても若干体が震えている。と、その時突然ドアが開き、

当麻「ふあゝあ……。」

欠伸をしながらその男 上条当麻が入ってきた。そして当麻は目の前にいるなのは達を見ると、

当麻「あっ！ 3人とも目が覚めたのか！ 良かった〜。一時はどうなるかと思ったぜ……。」

そう言ってホッと胸を撫で下ろした。すると、

なのは「あの、あなたは？」

当麻「ん？ ああ、俺は……」

そこへさらに……

一護「おい、当麻。どうしたんだ？……って、そいつらもう目覚めたのか！」

リクオ「えっ、本当に！？良かった……見た感じ、もうほとんど怪我也大丈夫みたいだね。」

当麻の声を聞いた一護とリクオも部屋に入ってきて、なのは達の様子に当麻同様胸を撫で下ろした。

一護「そついやあ、まだ自己紹介してなかったな。俺は黒崎一護、よろしくな。」

リクオ「僕は奴良リクオ。よろしくね！」

当麻「で、俺は上条当麻。この部屋の持ち主だ。よろしくな。」

なのは「あ、私は高町なのはって言います。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウンです。」

テスタロッサ

はやて「私は八神はやてや。3人共、よろしゅうな。」

当麻「ああ、よろしくな！あ、それと俺達のことは普通に下の名前で呼んでくれて構わないし、敬語もいらねえよ。こっちも普通なのは、フェイト、はやてって呼ぶからさ。」

リクオ「そうだね。敬語なんかで話し掛けられると変に緊張しちゃうし……。」

フェイト「うん、わかった。ねえ、当麻……どうして私達はここにいるの？」

当麻「……覚えてないのか？」

当麻の問いになのは達3人は首を横に振った。それに対して当麻は3人に有りのままを話した。自分たちが学校から帰る途中、路地裏から突然強い光が現れたこと、光の発する源に向かっていくとそこには青白く光る球体があったこと、そしてその球体が突然光りだし、しばらくしてその光が消えると、そこになのは達が深い傷を負って倒れていたことを……。

当麻「で、俺達で3人をこの部屋まで運んだっ訳だ。」

当麻の話聞いたなのは達はどこか思い詰めたような表情をしながら考えていた。と、ここで一護がそんなのは達の様子を見て、思わず口を開いた。

一護「どうした？ ひょっとしてまだ怪我してたところが痛むのか？」

なのは「え？ あ、ごめんね。全然大丈夫だよ。」

一護「そうか…なら良かった。治療しといたから、怪我はもうほとんど治ってると思うんだが、どうだ？」

なのは「……そういえば私達すごい怪我をしてたはずなのに……。」

はやて「何ともあらへんな。」

フェイト「じゃあ、一護が怪我の治療をしてくれたの？ それじゃあ、一護は治癒魔導士？」

だが、この質問に対する一護の応答はフェイト達にとって想定外の答えだった……。

一護「……魔導士って何だよ？」

なのは「え……………魔法を使ったんじゃないの？」

すると、

リクオ「……ええと……………魔法って、あの良くアニメとかでやってる魔法のこと？……………」

当麻「上条さん達はそんなの使いませんよ。」

なのは「……………どういうことなの……………」

と、ここではやてが当麻達に尋ねる。

はやて「一つだけ質問するで……………ここは何県の何市なんや？」

リクオ「え……………東京都の学園都市だけど？」

なのは「ええええっ!?!? 東京ってことは、ここって地球!?!?」

はやて「でも……学園都市って、なんや? 私らそんな知らんで……。」

その言葉に当麻達は驚きをあらわにした。

当麻「……学園都市を……知らない?……」

「護」……どういふことだよ、一体……。」

と、その時だった。

???「知りたいか? 黒やん。」

全員「っ!?!」

突如聞こえてきた声に全員が驚き、声のした方を見た。すると、窓が開きそこから1人の男が入ってきた。そしてその姿を見て当麻とリクオが声を上げた。

当麻「土御門!?!」

リクオ「土御門君、こっちに戻ってたの!?!」

土御門「よう、上やん！ 黒やん！ リクやん！ 3人共、久しぶりだにゃー!」

一護「土御門、お前なんでここに?」

土御門「なに、ちょっとした仕事ってやつだにゃー!」

土御門は軽い調子でそう言ったが、当麻達は“仕事”という言葉を聞いて顔を険しくなった。

当麻「っ！ おい、土御門……仕事ってまさか……!？」

当麻がそう言うと、土御門は先ほどとは違いどこか真剣さを含んだ笑みを浮かべながら口を開いた。

土御門「……ああ、その通りだぜい、上やん。」

すると土御門はなのは達の方を見た。そして……

土御門「俺の仕事は……そこの3人についてだ。」

そして大きく歯車が動きだす



「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだよね、いやマジで！（後  
どうも！ 黒狼です！

やっと当麻達主人公となのは達ヒロインが初対面！ なんか今回ま  
で変に長く感じました、たかだか3話なのに……。

そして土御門を登場させました！ やはり学園都市に彼の存在は不  
可欠ですからね。シリアス展開になったら、かなり重要なポジシ  
ョンになると思います。

ではまた次回！

良いことを言った後にはトラブルが付き物。(前書き)

今回かなりグダグダな上に駄文になってしまいました。そして今回のはとフェイトがかなり空気です。本当すいません……。

では、本編をどうぞ！

良いことを言った後にはトラブルが付き物。

土御門「俺の仕事は……その3人についてだ。」

土御門はなのは達を見ながらそう言った。すると一護は、

「一護」……それじゃあお前は俺達の見たことを……」

土御門「知ってるぜい。俺はそれを調べに来たんだにやー。」

当麻「っ！ じゃあ、まさかあれは!？」

当麻が声を上げて尋ねるが土御門は首を振ってそれを否定した。

土御門「それは違うぜい、上やん。これはあくまで俺の独断だから、そっち側とは無関係だにやー。そもそもおそろくこのことにはこの世界の誰も関わってないし、この世界の誰にもあの現象については分からないと思うぜい。」

当麻「……誰も関わってない？」

リクオ「それにあの光について誰にも分からないって一体どういうこと……？」

当麻とリクオは土御門の言葉の意図が掴めず首を傾げた。

土御門「上やん、リクやんよく考えて見るにやー。俺は『“この世界”の人間には』って言ったはずだぜい。」

それを聞き当麻達はその意味を考える。なのは達は話の中心であるにも関わらず、目の前で繰り広げられる話し合いにただ呆然としていた。と、ここでリクオが何かに気付き、恐る恐る口を開いた。

リクオ「……………土御門君!“この世界の”ってことはまさか!？」

土御門「気付いたみたいだな、リクやん。その通りだぜい。」

そう言うと土御門は再びなのは達を見た。そして、

土御門「そこにいる3人は別世界の……それも平行世界の人間ってことだよ。」

土御門がそう言うと、当麻達はしばし呆然となり部屋の中が静まり返った。すると今まで黙っていたはやてが声を上げる。

はやて「ちょ、ちょお待って！ 私らが平行世界の人間ってどういうことや!？」

土御門「ええと……お前ははやてだったかにやー？」

はやて「な、なんで私の名前を……」

土御門「そんなん自己紹介の辺りから見てたからに決まってるぜいで、一つ聞きたいんだが、お前とそっちにいる……なのはだったか？ 名前からして日本人だな？」

なのは・はやて「うん（せやで）。」

土御門「じゃあ、何県何市の生まれだ？」

なのは「え？ 神奈川県海鳴市だけ……。」

土御門「…上やん、地図帳持つてるかにゃー？」

当麻「地図帳？ ああ、あるけど。」

当麻は地図帳を持ってきて土御門に渡すと、土御門は神奈川の詳細な地図の載っているページを見る。そして、

土御門「神奈川に海鳴市なんて地名はないぜい。」

なのは「フエイト・はやて「えっ！！??？」

土御門「ほいつ。」

土御門から地図帳を受け取ったなのは達は隈無くそのページを見てみるが、

はやて「あ、あらへん……。」

フェイト「う、うそ……。」

なのは「そんな……。」

衝撃の事実を知ったなのは達は呆然とするしかなかった。

土御門「まあ、俺も“学園都市”の存在を知らない時点で妙だとは思ってたが、まさか本当に異世界の……それも平行世界から来た人間だとは思わなかったぜい。」

そして再び静寂が部屋の中を包み込んだ。まあ、当然である。平行世界などという最も非現実的な話が出てきてしまったのだから……。と、ここでリクオがはやてに尋ねる。

リクオ「はやて……一つ聞いていい？」

はやて「……なんや？……」

リクオ「……はやて達から妙な力の気配を感じるんだけど……はやて達は一体何者なの？ それにあの傷だったただの傷なんかじゃなかった。あれは間違いなく戦いで負った傷だよね……一体はやて達に何があったの？」

土御門「俺もそつちが本題で来たんだにゃー。お前らからは何かとてつもない力を感じるぜい、若干冷や汗が出るくらいにな……。上やんと黒やんも薄々気付いてだんだろっ？」

当麻「……ああ。」

一護「まあな……。」

はやて「っ……そ、それは……。」

はやて達は口を開くことが出来なかった。リクオ達を心から信じていることが出来なかったのだ……。この世界に来る前の出来事が頭にちらつくせいで……。するとリクオが語り始めた。

リクオ「ゴメン……。僕達ははやて達のことを全く知らないし、はやて達があんなに酷い怪我をする理由なんて想像もつかない……。でもはやて達が悪い人達じゃないことってことは断言できるよ……。僕達もいるんな人を見てきたから……。だから助けたいんだ、はやて達を。僕も当麻も一護も、困ってる人を見たら助けずにはいられないお人好しだから……。だから話して。僕達ははやて達を絶対に信じるから。」

リクオの切々と話しかけてくれる態度を見たはやては、



はやて「……………ホンマに信じてくれるんか？」

なのは・フェイト「はやて（ちゃん）！？」

はやて「もしここがホンマに平行世界なら、私らのいた世界のことを話しても問題あらへんよ。それにリクオ君達は私達の命の恩人やし、ここまで言ってくれるんや……………本当のことを話さんとな……………」

はやての真剣な言葉になのはとフェイトは口を閉ざすしかなかった。

はやて「……………今から話すんは全部私らの世界の真実や……………」

そしてはやては話し始めた。

はやて達が住んでいた世界“地球”以外にも数多の世界が存在しており、それを総称して“次元世界”と呼ばれていたこと。

そしてその次元世界の平和を守り管理する巨大組織“時空管理局”があり、その組織は魔法を使う“魔導師”と呼ばれる人々の集まりであること。そして自分たちはそれぞれ事件に巻き込まれたことでその存在を知り、魔導師となって時空管理局に入局しそして管理局員となったことを……………。

当麻「地球以外の世界……か……。」

リクオ「それに魔法か……あの時一護が怪我を治したって聞いて“魔法”って言葉を口にしたのはそのせいだったんだ……。まさか本当にあるなんてね……。」

一護「じゃあ、はやて達も魔法の力を……。」

はやて「持つとるよ。それも私らは向こうではエース級の魔導師やっただから。」

土御門「まああれだけ力の気配が大きければそれも納得だぜい。」

リクオ達ははやての話聞いて、それぞれ感想を口にした。だが実は彼らの態度は一般人と比べ恐ろしいほど冷静なのだ……。と、ここで土御門がこう言った。

土御門「にしても時空を管理する正義の機関なんざ胡散臭過ぎて裏が有るとしか思えないにゃー。」

それを聞いたはやて達は皆顔を俯かせた。そして、

はやて「そつや……時空管理局には裏が有ったんや。そしてそれが

大きな事件を引き起こしてしもつた……まあ、それは何とか解決できたんやけどね。でもその原因は局のトップだった人間達の欲望が引き金やった……。だから私らは皆で上層部の裏を調べたんや。もうそんな大事件が起きて、関係のない誰かが傷付くことのあらへんように……。そんな悲しみと憎しみの連鎖が起こさないために……。そして実態解明まであと一歩まで来た……。けど知らなかった……。どんな手を使ってでも上層部はそれを揉み消そうとすることを……。そして……。それは起こったんや……。」

はやて、なのは、フェイトはある世界に潜伏している犯罪者達を逮捕するという任務を受けて、局から派遣された部隊の魔導師達と共にその世界に到着した。そしてはやて達は部隊の魔導師達と共に犯罪者達を追い詰めた時……。突然後ろから攻撃を受けた。その攻撃は……。派遣された部隊の……。味方であるはずの魔導師達だった。そう……。彼らははやて達を抹殺するために上層部によって集められた暗殺者だったのだ……。はやて達は深手を負いながら応戦するも、相手は暗殺に特化したプロである上に人数も多く、徐々に追い詰められていった。そして、リーダーと思われる男の一言ははやて達を絶望へと突き落とした……。

「滑稽だな……。もうお前達の仲間誰も生きていないと言うのに……」

大切な者達の死を告げられたはやて達の心は粉々に砕かれ……。そして、彼女達は地へ墮とされた……。

はやて「……ほんで目が覚めたらこの部屋だったんや。……これが私らに起こったことの全てや……。」

そして再び部屋が静まり返った。なのはやフェイトはすっかり顔色が悪くなってしまい、体も小刻みに震えていた。特になのはは今にも倒れてしまうのではないかと思ってしまうほど酷い。そしてそんななのは達の様子を見て、一人の男の我慢が限界に達していた……。

ドゴンッ

静寂に包まれていた部屋の中に低くて鈍い音が響き渡る。それは……上条当麻が自分の拳を思い切り壁に叩きつけた音だった……。

当麻「……何だよ、それ……何でそんなことのために人の命が奪えるんだよ……何でそんなくだらないことのために3人が傷付かなきゃなんねえんだよ！……何でこの3人の想いが踏み躪られなきゃなんねえんだよ……！」

当麻の叫びは一護やリクオの気持ちも代弁していた。そして当麻は拳を下ろすと、

当麻「土御門……頼みがある。」

土御門「……なんにゃー？上やん。」

当麻「……あの人に会わせてくれないか？」

土御門にそう尋ねた。土御門はそれを聞き、一瞬眉をひそめる。するとさらに、

一護「やっぱそうか……。」

リクオ「僕も同じこと考えてたよ、当麻。」

一護とリクオも相づちをいれた。

土御門「上やん、黒やん、リクやん、まさか……。」

当麻「ああ……なのは達がここ学園都市で過ごすことを認めてもらう。」

なのは・フェイト・はやて「えっ！！??？」

当麻の言葉になのは達は驚きを隠せなかった。それもそうである。

なのは達はこの世界には存在しない人間なのだから、当然戸籍がない。そんな人間を保護するのは警察か、もしくは彼女たちの勤めていた时空管理局くらいである。だが、当麻は学園都市に認めてもらうと言った……つまり当麻達は学園都市の上の人間と交渉できる立場にあるということだ……。

土御門「……やっぱり上やん達は面白いにゃー。いいぜい、あの人に話してみてもやるよ。話が着き次第また連絡するぜい。」

リクオ「さすが土御門君だね……ありがとう。」

土御門「俺はそんなにいい人間じゃないにゃー。ただリクやん達には借りがあるし……それにリクやん達といると飽きないから……。ただそれだけのことだにゃー……。」

そして土御門は出口へと向かっていく。と、ここではやてが、

はやて「なあ、当麻君、一護君、リクオ君。」

当麻「ん？」

一護「なんだ？」

リクオ「どうしたの？ はやて。」

はやて「3人は一体何者や？ 何で出会ったばかりの私らにそこまですてくれるんや？」

リクオ達3人にそう尋ねる。すると、

リクオ「さっき僕も言ったでしょ？ はやて。」

一護「俺達はただのお人好しな高校生だよ。」

当麻「ただちよつと顔の利く……な……。」

リクオ達はそう答えた。と、ここで部屋から出ていこうとした土御門が立ち止まると……

土御門「じゃあな！ 上やん！ 黒やん！ リクやん！ せつかくの美少女3人との夜、せいぜい楽しむんだぜい！……！」

爆弾発言を残し出ていった……そして、

当麻・一護・リクオ・なのは・フェイト・はやて  
「……………は(え)?……………」

今日一番の静寂が部屋を包み込んだ……………。

END



良いことを言った後にはトラブルが付き物。(後書き)

どうも！ 黒狼です！

今回は執筆にかなり苦労しました。特になのは達が平行世界から来たということに上条さん達が気付く前の件くだりが書きにくかったですね。気付いた方も多いと思いますが、“魔術”という単語を出す訳にはいかなかったので色々濁した結果、かなりグダグダになってしまいました……。

あとなのはとフェイトがかなり空気でしたね。まあ、それにも訳があると言えはありますが……。

そして最後は微妙にギャグ落ちで終わらせました。かなり無理があるとは思ったのですが、次回に繋がってくるので書きました。

今回は恋愛重視で行く予定です。ではまた！！

魔王？死神？王？      いいえ、普通の女の子です！！（前書き）

やっと投稿できた……………。

今回フラグがバッキバキです！！      そしてかなり長めです！！

あ、ちなみに今更ですが、なのは達の格好は管理局の陸士の制服（茶色のスーツ）です。バリアジャケット姿ではないですよ。

では、どうぞー！！

魔王？死神？王？      いいえ、普通の女の子です！

リクオ「……………はあ……………」

リクオは思わず溜め息をついた。すると、

はやて「ホ、ホンマにごめんな、リクオ君……………」

はやては申し訳なさそうな顔でそう言った。

リクオ「は、はやてが謝ることじゃないよ！！      ただ、ちょっと緊張しちゃうっていつか……………さあ……………」

はやて「せ、せやね……………」

2人の間にギクシヤクとした空気が流れる。ここはリクオの部屋……………その部屋のちやぶ台にはリクオとはやてが向かい合って座っている……………。そもそも何故こんなことになっているのか……………それはほんの少し前に遡る……………。

一護「……なあ、当麻、リクオ……。」

当麻・リクオ「……なんだ（なに）？」

一護「……ちよつと殺<sup>や</sup>つてくるわ。」

そう言つて部屋から出ていこうとするが……

リクオ「ちよつと待って一護！？ やるって何！？ やるの“や”の字からしてダメでしょ！！ 土御門君をあの世に送る気！？？」

一護「当たり前だろ。」

リクオ「あっさり認めないでよ！！ 本当に洒落にならないよ！？ と、当麻！！ 当麻も一護を止めるの手伝って！！ このままじゃ土御門君が天に召されちゃうよ！！」

当麻「はあ、しょうがねえな。止める、一護！」

一護「何で止めるんだよ当麻!!」

当麻「あのなあ、土御門にはなのは達のためにあの人との交渉を頼んであるだろうが…。それなのに交渉役をあの世に送ってどうすんだよ。」

一護「うっ……」

リクオ「そ、そうだよ一護。土御門君だってなのは達のために動いてくれてるんだから、そんな酷いことをしちゃ……」

当麻「殺<sup>や</sup>るなら交渉が終わってからにしろ。そんな時は俺も参加するから。」

リクオ「当麻!? 殺すことには賛成なの!? ていうか当麻もやる気!?!」

当麻「今回は“鉄の処女”を使ってみようと思うんだけど……」。

一護「おお、いいなそれ。」

リクオ「当麻！？ 何で当麻が“鉄の処女”なんて物持ってるの！  
？ あれ拷問道具だよな！？ そんなもの一体どこから……………あ、  
いいや。何となくわかったから……………」

ちなみに鉄の処女とは中世ヨーロッパ時代に使われていた拷問道具です。見た目は大体2メートルくらいの大きさの聖母マリアをかたどった鉄の人形のだが、前面が左右に開くようになってその左右の扉の内側には無数の針が付いている。詳しく知りたい方は Wikipedia で調べてみてください！

リクオ「……………つて、そんな詳しい説明はどうでもいいから2人共  
落ち着いてよ！！！」

当麻「なあ、ここをこつしたらどうだ？」

一護「お、それもいいな！じゃあ、その後こつして……………」

と、その時……………」

ブチッ

……何かが切れる音がした。そして……

リクオ「……………当麻、一護。・。・。S しよづか?」

しばらくお待ちください

リクオ「ごめんね、なのは、フェイト、はやて。迷惑掛けちゃって……ほら、当麻と一護も謝って!!」

当麻・リクオ「……………す、すいませんでした……………」

はやて「え、ええよ別に。気にしてへんから……………」

はやては苦笑いを浮かべながら答えた。まあその理由は怒っている時のリクオが某白い魔王に見えたからなのだが……………。

一護「つーか今何時だよ？」

当麻「……午前2時だ。」

リクオ「明日休みで良かったね。」

一護「確かにな。けどマジではやて達の寝る場所どうするか？」

当麻「俺達3人の内の誰かが部屋を空けて残りの2人のどっちかの部屋に泊まって、空いた部屋にはやて達3人が寝ればいいんじゃないか？」

フェイト「そ、そんなの悪いよ！！ 私達にそんなに気を遣わなくて……」

リクオ「でも僕達の部屋って2人が限界だから、3人で寝るのは無理だよ。」

一護「……じゃあそうなるか……一つしかねえな……。」



という訳で結局、当麻はなのはを、一護はフェイトを、そしてリクオははやてをそれぞれ自分の部屋に泊めることになったのだが……

リクオ（お、女の子を部屋に泊めるのなんて初めてなんだけど／／／……。）

はやて（お、男の子の部屋に泊まるのなんて初めてや／／／……。）

お互いに初めての経験であるため緊張してしまっていた。まあ、リクオはおとなしい性格なため恋愛経験など無いに等しいし、対するはやても管理局では人気が高く男性局員からのお誘いを受けることもしばしばあったがそういったものは全て断ってきたし、そもそも知り合ったばかりの男の部屋に泊まるという経験などあるはずもないので、こういう雰囲気になってしまうのは仕方ないことなのだが……。と、ここで、

はやて「そ、そういえばリクオ君の部屋って和室なんやな？」

はやてがギクシャクとした空気を何とかしようとして口を開いた。

リクオ「え、ああ、うん。僕の実家は古い武家屋敷みたいな家だから、和室じゃないと落ち着かなくなって……この部屋も元々当麻や一護の部屋と同じ洋室だったんだけど、無理を言って改装したんだ。」

はやて「そ、そうなんか……。」

……

……

だが一向に会話が膨らまない。

はやて（ダ、ダメや！？ 全然会話が続きへん！ 何でや！？ いてもなら何時間でも喋ってられるのに……と、とにかく何か話さへんと……）

はやては何とかこの空気を何とかしようと思いを巡らせるが一向に打

開策が浮かばずあたふたしていた。すると、

リクオ「……………あのさ、はやて。」

はやて「な、何や!？」

突然リクオに話しかけられ、はやてはやや上ずった声で答えた。そして少しの間が空き、

リクオ「……………ごめんね……………」

はやて「え?……………何でや? 何でリクオ君が謝るんや?」

はやてから見ればリクオは自分を助けてくれた上に、こうして受け入れてくれた人間である。だからリクオが自分に謝る理由がはやてにはわからなかったのだ。

リクオ「……………さっきの話……………あんなに辛いことをはやての口から話させて……………本当は思い出さなくなかったよね?……………」

それを聞いたはやては今できる精一杯の笑みを浮かべ、

はやて「ありがとつな、リクオ君。でもあれは私が話さなあかんことやったんや……こんなことになったんは、私のせいなんやから……」

リクオ「え？……」

はやて「私なんや……最初に管理局の裏を調べようと提案したのは……。勿論あの時に言った私の想いは本物やし、なのはちゃんやフイトちゃんもその想いに賛成してくれた……けど、今でも思うんですよ……私のやったことはホンマに正しかったのかって……なのはちゃんやフイトちゃんを巻き込んで……私の……私の大事な家族を犠牲にしてまでするべきことだったのかって……」

リクオ「っ!？」

はやての言葉にリクオは口を開くことができなかつた。目の前にいる少女は自分の家族を失ったにも関わらず、その悲しみを堪え話してくれたことに衝撃を受けたのだ。

はやて「……あ、あかんや、私。こんなことリクオ君に話しても何にもならへんのに……。ほ、ほなちよつと外で風にでも当たってくるわ!」

そう言うてはやては立ち上がるとリクオに背を向けて部屋から出て

行くつもりとした………だが、

?????」「……おい……。」

はやて「え……。」

はやては後ろから聞こえた声に思わず振り返り、そしてその声の主を見て……固まった……。何故なら……

はやて「だ……誰や……」

先ほどまでリクオがいた場所に1人の男が立っていた。藍色の外套が特徴の和の服装、どことなく荒々しさを感ずる雰囲気、鋭い目付き、そして白黒の長く棚引く髪……全てにおいてリクオと真逆な男である。はやてはそんな目の前の男を警戒しながら尋ねた。

はやて「あなたは誰や？ リクオ君はどこに行ったんや？」

すると、

?????」「……リクオだよ。」

はやて「……は？」

リクオ「だから俺がリクオだって言ってるだろ……。」

しばしの沈黙、そして……

はやて「ええええええええええっ!!!!!!!!????」

部屋にはやての絶叫がこだました。

リクオ? 「……ああ、そういやこの姿になってた時お前は気を失ってたのか。これは強いて言うなら、俺“奴良リクオ”のもう1つの姿だよ。」

はやて「……もう1つの……姿?……」

はやてはイマイチ理解できず首を傾げる。

リクオ? 「ああ。普段の俺はお前の知ってる姿なんだが、俺の身に危険が及んだり感情が高ぶったりするとこの姿になるんだよ。まあ、昔は夜にだけこの姿になってたから他の連中はこの姿の俺を“夜のリクオ”って呼んでるけどな。」

はやて「よ、夜のリクオ君……。」

夜のリクオがはやてに自分の能力について説明するが、はやては目の前にいる男がリクオであると未だ信じることができない。

夜リクオ「まあ、信じる信じないはお前の自由だがな。どうせ元の姿に戻ったところでちゃんと説明するだろし、それに俺はお前に言いたいことがあっただけだから……。」

はやて「言いたい……こと?……。」

すると夜リクオは今まで浮かべていた笑みをしまった。そして、

夜リクオ「……お前のしたことは……間違いなんかじゃねえよ……。」

はやて「え……。」

夜リクオ「お前のいた世界が実際どんな場所だかは知らねえ……だがよ……他の奴らのことを想って闇に立ち向かうのは絶対に間違いないなんかじゃねえ……。」

はやて「……せ、せやけど……。」

夜リクオ「辛いんなら泣けばいい。」

はやて「え、でも……。」

夜リクオ「泣かねえことが強さじゃねえよ。俺のおふくろも言ってたぜ、“女は涙の数だけ強くなる生き物だ”ってな……むこうじゃエースだか何だか知らねえが、今のお前はただの1人の女なんだからよ……泣きたいんなら泣け……。」

リクオの言葉を聞いたはやての心は限界だった。そして……

はやて「う、うわああああああん…………。」

リクオの胸に飛び込み、そのまま大声で泣き始めた。まるで今まで溜め込んでいた感情を全て吐き出すかのように……。そんなはやてをリクオは少々困惑しながらも優しく抱き締めていた……。

しばらくして、

はやて「……すう……すう……すう……すう……。」

夜リクオ「おいおい……そのまま寝るかよ、普通…………。」



現在の時刻（午前3時）と今までの疲れもあつたせいか、はやてはそのまま夜リクオの胸の中で眠りについてしまったのだ……。

夜リクオ「はあ……仕方ねえ……。」

リクオははやてを起こさないように抱き上げると隣の部屋に行き、予め敷いておいた布団にはやてを寝かした。そして部屋から出ていこうとしたのだが……。

夜リクオ「……こいつはわざとか？……。」

はやての右手がリクオの外套の胸袖を掴んでいたのだ。

夜リクオ「……ちっ……めんどくせーな……。」

リクオはそう言って胸袖を掴んでいたはやての右手を掴み無理やり引き剥がそうとした。と、その時、

はやて「……もう……嫌……や……もう……1人になるのは……いや……や……。」

一筋の涙を流しながら呟いたその寝言は最早はやての願いそのものに他ならなかった。

それを聞いたリクオははやての手を引き剥がすのをやめ、

夜リクオ「……ったく、しょうがねえな……。」

はやての布団に自分も入り、包み込むような形で腕を彼女の背中へと回し体を引き寄せ、そのまま眠りに着いた。

〈黒崎一護の部屋〉

少し時間は戻ってはやてとリクオがギクシャクした雰囲気にいる頃、  
一護もフェイトを部屋に入れていた。

フェイト「一護の部屋って綺麗に整頓されてるね。」

一護「ん？ ああ、まあな……意外か？」

フェイト「えっ！？ あーち、違うよ！ 別にそういつつもりじや……。」

一護「構わねえよ、他の奴らにもよく言われるしな。さてと、寝る準備しねーと……」

フェイト「あ、手伝うよ。」

一護「平気だよ、隣の部屋に布団一つ敷くだけだし。適当に部屋の中を見て待っていてくれ、すぐに終わっからよ。」

フェイト「う、うん。ゴメンね、泊めてもらっ身なのに……。」

一護「言っただろ、俺はお人好しなんだよ。んじゃちょっと待っていてくれ。」

そう言っで一護が隣の部屋へ行くとフェイトは

フェイト（男の子の部屋かノノノ……クロノの部屋には当たり前のように何度も入ったけど、さっき知り合った男の子の部屋に泊まることになるなんて思いもなかったよノノノノ……）。

今までに無い状況に少し緊張していた。そしてフェイトはそれを紛らわせようと部屋の中を見回す。すると、あるものに目が止まった。

フェイト「これって……。」

それは棚に置いてあった大きめの写真立てだった。そこには何枚かの写真が飾られているが、フェイトの目を引いたのは一護とその妹と思われる2人の少女の写真だった。

一護「終わったぜ……ん？写真を見てたのか？」

フェイト「え！？ あ、うん。」

突如後ろから聞こえてきた一護の声にフェイトは少し驚いた。

フェイト「この2人の女の子は一護の妹さん？」

一護「ああ。こっちの茶髪でワンピースを着てるのが双子の姉の“柚子”で、そっちの黒髪でボーイッシュな奴が妹の“夏梨かりん”っていうんだ。」

フェイト「へえ、何かそっちの柚子ちゃんよりこっちの夏梨ちゃんの方がお姉さんに見えるなあ。」

一護「実際そうだよ。柚子は天然でおつちよこちよいんだけど、夏梨はかなりしっかり者だしな。一緒に暮らしてて何度も“姉妹逆だろ

” っ て 思 っ た し …… 。”

フェイト「ふふっ、そっか……。」

と、その時、フェイトの頭に2人の子供の笑顔が浮かんだ。1人は10歳くらいの赤髪の少年、もう1人は少年と同年くらいでピンク色の短い髪の少女である。

一護「どうした？ フェイト。」

フェイト「え？ あ、ゴメンね。ちょっと考え事をしちゃって……。」

一護が突然黙り込んでしまったフェイトに声を掛けると、フェイトは一護の方を向いて答えた。すると、

一護「っ！？ お、おいフェイト！ お前何で泣いてんだ！？」

フェイト「え……………」

一護がフェイトの顔を見て驚きの声を上げた。それを聞いたフェイトは思わず右手で自分の頬に触れてみる。すると、確かに涙が流れ

ていた……。

フェイト「あ……ち、違うよ、一護。これは別に泣いてるとかじゃ……えっと……大丈夫だから……その……。」

フェイトは溢れてくる涙を拭いながら一護に心配かけまいとその場を取り繕おうとするが余計に混乱してしまう。すると、それを見た一護はフェイトの両肩を掴み、こう言った。

一護「大丈夫じゃねえだろうが……。」

フェイト「え……。」

一護「涙を流して大丈夫な訳ねえだろうが……んな辛そうな顔して誰が大丈夫って信じるんだよ……なんか理由があんだろ……なら話してみるよ。話さなきゃ何も伝わらねえぞ……。」

フェイト「っ!」

一護の言葉にフェイトは息を呑んだ。それはかつて自分の親友が敵だった自分に対して言った言葉だったのだから……。そしてフェイトはポツポツと語り始める。

フェイト「私、2人の子供の保護責任者になって親代わりをしていたの……エリオとキャロっていうんだけどね……まだ2人共10歳くらいだったんだけど、どうしても管理局に入りたいて言っつて、管理局に入つて私達と一緒に働いてたの……。けど…もう…2人は……」

一護は何があつたのかを悟ると口を開くことができなかつた。すると、

フェイト「私ね…お母さんが好きだつた。お父さんは生まれた時にはもういなくなつたから、私の親は母さんただ一人だつたの。だけどお母さんも私が9歳の時に亡くなつて、私は天涯孤独になつた。でもそんな私をある優しい人が養子にしてくれて、母さんになつてくれて、家族の皆も優しくしてくれた……。その時に決めただ。私と同じような子供達を救うつて……。その子達を守つていこうつて……。でも……。私は守れなかつた……。家族同然だつたエリオとキャロを……。私は……。」

そう口にするフェイトの体は小刻みに震えていた…。すると、

一護「もういい、フェイト……。」

フェイト「一護……?」

一護はフェイトをそっと抱き締めた。そして…

一護「俺もおふくろを失ってるんだ。」

フェイト「え……………」

一護「俺が5歳の時、おふくろは俺を庇って殺された…………その時俺は自分の弱さを呪った。そして決めたんだ。今度は俺が家族を…………袖子と夏梨を守るってな…………だから大切な誰かを失った悲しみも守れなかった悔しさもわかってるつもりだ…………だから無理して強がらなくていい…………お前は…………一人の女の子なんだからよ…………。」

それを聞いたフェイトは一護の胸板に顔を埋めた。そして…………

フェイト「うっ…………ぐすっ…………うっ…………」

静かに泣き始めた…………。そんなフェイトを一護は黙ったまま左手で彼女の華奢な体を抱き締め、右手で彼女の頭を優しく撫でていた…………。



〈上条当麻の部屋〉

雲一つない満天の夜空……そこには名もない数多の星達が輝き、お互いを照らし合っている……。そんな空を1人の少女　高町なのははベランダからただじっと見ていた。だが、そんな彼女の表情は空とは逆に陰が差していて、その目に光はなかった……。

なのは「……私は……」

意味もなく言葉を発しては止める……少し前からこの繰り返しだ……。一体何時になれば、この無意味な行動は止まるのだろうか……。なのははそんなことを頭の中で考えていた。だが思っていた以上に早くその時は訪れる……。

「眠れないのか？　なのは」

背後から聞こえてきた声になのはは肩をビクッと動かして反応するも、大して驚いた様子もなく後ろを振り返って姿を確認し、名を呼んだ。

なのは「当麻君……」

当麻「……空を見てたのか？」

なのは「……うん……。」

そう言うとなのは再び空を見上げた。当麻もそれに倣い、雲一つない夜空を見上げる。すると、

なのは「こつちの世界でも空は変わらないんだね……やっぱり綺麗だなあ……。」

なのははそう呟いた。そして彼女の話は続く……。

なのは「私ね、魔法で空を飛ぶことが大好きだったの……。一度飛べなくなったこともあったけど、飛びたいっていう自分の思いだけで私は頑張ることができた。」

そう話すなのはの表情は笑顔だが、それは今にも消え入りそうなくらいの哀しみを秘めた儂いものだった。そして当麻はそんな表情で話すなのはの横顔をじっと見ながら黙って聞いている……。

なのは「そんな時、私に凄く大切な子ができたの。その子は普通とは違う子だったけど私のことを“ママ”って呼んでくれて、一緒に過ごしていくうちにいつの間にかその子は私にとってかけがえのな

いものになつてた……。私達2人を引き裂くような辛くて苦しい事もあつたけど、それも2人で正面から向き合つて乗り越えた……。その時決めたの……。この子を“母親”としてずっと傍で守つていこうって……。この子と一緒に見上げるこの空を守つていこうって……。なのになのに……」

なのはの顔が俯くのと空を大きな雲が覆つたのは同時だった。そして当麻は暗くなつた世界で見た……。なのはの頬に伝ふ涙を……。

なのは「それなのに……守れなかった……どっちも守ることが出来なかった……。もうあの子には……“ヴィヴィオ”には会えない……。……どんなに手を伸ばしても、もうヴィヴィオには届かない……。もう私には……何も守れ……」

なのは最後まで言葉を紡げなかった。何故なら……

なのは「当麻……君……？」

当麻がなのはの頭を自分の胸に押し当ててきたのだから……。そして当麻はそのままなのはに語り掛ける。

当麻「……信じる……」

なのは「え……………」

当麻「信じる…………お前とヴィヴィオはまた会えるって…………。」

なのは「…………でもそれは…………もう……………」

当麻「確かにそれはどうしようもないくらい儂くて、すぐに消えちまいそんな幻想だろう。けどその幻想は誰にも否定することはできないし、消すこともできないだろ。これはお前だけの幻想であり…………何よりお前の願いだろ？ ならお前が信じてる限り、その幻想はずっとお前の中で存在し続けるし、信じ続けてればきつとそれは現実になるさ。もしそれを踏み躪ろうとするくんだりない幻想があったらそんな時は…………俺がその幻想をぶち壊してやるよ。」

その言葉を聞き、なのははふと顔を上げると、ちょうど雲の影が消え始めてきた。そして完全に消えると、そこには柔らかい優しいげな笑みを浮かべる当麻の姿があった。そして、

当麻「お前の幻想は、俺が絶対守るよ…………。」

その言葉を聞いた瞬間、なのはの視界は涙で滲んでしまい見えなくなってしまうた。そして…………

なのは「当麻君……！」

当麻「うおっ!?!」

なのはは目の前にいるはずの当麻に思い切り抱きついた。当麻は突然のなのはの行動に驚き一瞬ぐらつくが何とか受けとめる。

なのは「うう、ぐすつ、うええええええん………」

大切な者達を守れなかった哀しみと虚しさに苛まれ心を枯らしていた少女は、それを潤すかのように当麻の胸で泣き続けた。まるで幼い子供が泣きじゃくってるかのように……。

そしてその後、なのはは泣き止むと顔を赤くしながらお礼と謝罪をし、自分の布団へと入った。それを見届けた当麻も自分のベッドへと向かい眠りに着いた。こうして夜は更けていった……はずだったのだが……

なのは「……すう……すう……すう……すう………」

当麻「……何故私のベッドになのはさんがいらっしやるのでせうか?………」

当麻が違和感を感じてふと起きてみると、隣になのはが寝ていたのだ。しかも微妙に服がはだけたりしていて正直……………当麻の理性が一瞬崩壊しかけた……………。だが彼女のあどけない寝顔を見て当麻は自然と笑みを零した。そして、

当麻（……………こいつ自身も守らないとな……………）

そう心から思ったのだった……………。

こうして夜は少女達の悲しみを洗い流しながら更けていく

魔王？死神？王？

いいえ、普通の女の子です！！（後書き）

はい、今回は前半ギャグで後半シリアスな恋愛にしました。なんか恋愛描写の3場面とも後半の展開が似たような感じと思った方もいると思います。すいません、これが私の限界です……………。

あとギャグも自分で書いていて微妙な気がしました。まあ、リクオが魔王化してる時点で最早いろいろと壊れてますね…………。もつと面白く、そして上手く書けるようになるべく精進していきたいです！！

次回は当麻達の言っていた“あの人”を、そして何人がキャラを出す予定です！ではまた！！

忙しい人の都合の良い日はめったにない！（前書き）

さらに長文になった上にグダグダ度合いが増しています……。前半  
とかはかなり酷いwwww……。

今回はまさかの人達が登場します！！

では、本編をどうぞ！



忙しい人の都合の良い日はめったにない！

A 9:00

↓ 奴良リクオの部屋 ↓

リクオ「……ん……もう9時……か？……」

リクオは起きてすぐ、目の前の状況を見て固まった。

はやて「……すう……すう……すう……すう……」

一、はやてが目の前で寝ている。

二、はやてを抱くような形で自分が寝ている。

三、はやての服がかなりはだけている。

リクオ（……え……ええええええええええっ！……？……？……）

ここで声を出さず、心の中で叫んだのは称賛に値するだろう。

リクオ（落ち着くんだ、僕！ 昨日のことを思い出そう。確かはやてが泣き疲れて寝ちゃったから、はやての布団まで運んで寝かせたけど服の裾を握ったまま離してくれなくて、寝言で“1人は嫌だ”って言ってたから仕方なく一緒に寝たのか、なるほど……って何やってんの僕　　！！???)

リクオはとりあえず布団から出ようとしますが、はやてが依然として服の裾を握ったまま離さない。すると、

はやて「……ん……あれ？……リクオ……君？……」

リクオ「あ……お、おはよう、はやて……」

はやて「え、あ、うん。おはようや、リクオ君……え？……」

ここでははやては自分の状態を見て硬直し、リクオに尋ねる。

はやて「な、何でリクオ君がここにいるんや!？」

リクオ「……覚えてないの？」

はやてはそれに頷く。

「……今から言うことは本当のことだからね？」

そしてリクオは夜の出来事をありのまま全て話した。それを聞いたはやては、

はやて「////////////////////」

顔を真っ赤に染め縮こまっていた。すると、

リクオ「えっとはやて……できれば手を離してくれるとありがたいんだけど……。」

はやて「え？……」

はやてが自分の手を見ると両方ともリクオの服の裾をがちりと掴んでいた。

はやて「あっ！ ぐ、ごめんな！ リクオ君。」

はやてが素早く手を離して引っ込めると、リクオはゆっくりと布団から出て起き上がった。そしてはやての顔をじっと見る。

はやて「ど、どないしたんや、急に／＼／＼／＼……。」

はやては突然リクオにじっと見られ、顔を再び赤くした。するとリクオは、

リクオ「……良かった。もう大丈夫そうだね。」

はやて「……え?……。」

リクオの言葉にはやては首を傾げた。

リクオ「昨日はやて凄く無理してるみたいだったから……少しは気持ちも落ち着いた?」

はやて「……せやね。だいぶ変わってきたわ……。せやけど、昨日はごめんなあ。迷惑掛けて……。」

リクオ「迷惑だなんて思ってないよ、はやて。僕ははやてにあんな

顔でいて欲しくなかっただけだし、それに……………はやてはそういう笑顔でいる方が僕は好きだよ。」

はやて「ふえ／＼／＼／＼！？」

リクオの不意打ちとも取れる発言にはやては頬を真っ赤に染めた。

リクオ「は、はやて、大丈夫！？ 顔が赤いけど……………」

はやて「だ、大丈夫や／＼／＼！！ ほ、ほな、早く一護君達を起こしに行くで／＼／＼！！」

リクオ「えっ！？ ちょっと待ってよ！ まだ僕着替えてないし！」

だがはやてはリクオの話を聞いておらずそのまま部屋を出て扉にもたれかかった。

はやて（い、今は反則やろ／＼／＼……………）

と、ここではやては今の自分の感情に気付いた。それは……………

はやて（もしかして私……………リクオ君のこと……………）

“恋心”である……。

A 9 : 30

〔黒崎一護の部屋〕

小さいテーブルを2つ繋げたものの上には、ご飯、味噌汁、焼き魚など日本の朝食の代名詞と呼べる料理が並んでいる。

一護「うしっ！ 完了！」

フェイト「うん。でもまさか朝ごはんを交代制で作ってるとは思わなかったよ。それに一護料理上手だし。」

一護「あ？ まあ俺と当麻とリクオの当番制は随分昔から当たり前のようにやってたし、それに妹が小さい頃は俺が作るしかなかったからな。親父は家事とか全くしねえし……。つか、そういうお前も

上手じゃねーか。」

フエイト「あ、ありがとう／＼。私昔は料理とか全然ダメだったんだけど、今の母さんが……あ、養子に引き取ってくれた人でリンデイさんっていうんだけど、その義母さんがすごく料理上手でよく教わってたんだ。」

一護「へえ、そうなのか……いい義母さんなんだな。」

フエイト「うん……そうだね……。」

しばらく続く沈黙……。すると、

フエイト「一護……昨日はありがとう……。」

一護「別に構わねえよ。あんな辛そうにしてる女を放っておくほど俺は薄情じゃねえよ。ただ……あれは勘弁して欲しかったがな……」

「…。」

フエイト「あう／＼／＼／＼……じ、じめんなさい／＼／＼……。」

「

フェイトは頬を赤くし、縮こまってしまった。一体なんのことが……それは昨日の真夜中にさかのぼる……。

昨夜

フェイトが泣き止んだ後、一護は自分のベッドに入り眠りに就こうとした。と、そこへ、

フェイト「一護、まだ起きてる？」

一護「ん？ ああ。まだ起きてるぞ。」

フェイト「ちょっと……いいかな？」

一護「……入れよ。」

するとフェイトが部屋に入ってきた。

一護「どうしたんだ？ フェイト。」



フェイト「う、うん／＼／＼……あのね／＼／＼……その／＼／……」

フェイトは頬を赤く染め、どこかソワソワしていた。そして、

フェイト「一緒に寝てもいいかな？／＼／＼……」。

一護「……は？」

一護はフェイトの言葉を聞いて思わず間の抜けた声を出すと、

一護「はあ！？ お、お前一緒に寝るって何考えてんだよ！？ んなことできるわけ……」

フェイト「ご、ごめんね！でも1人だと……あのことが頭に浮かんで……眠れなくて……」

そう口にするフェイトは目に見えて怯えていた。まあ、目前まで迫っていた死の恐怖、大切な者を失った悲しみ、そして知らない世界に来てしまったことへの不安はそう簡単に消えることはない。そんなフェイトを追い返すことなど一護にできるわけがなかった。

一護「……それで前前の心が落ち着くって言うなら俺は何も言わねーよ。好きにしる。」

フェイト「……………うん！」

フェイトは一護の承諾に対し子供のような純粋な笑顔で応えた。そして枕を持ってくると一護の隣へと潜り込み、一護の腕に抱きついた。

一護「お、おい！？ お前何して……………」

フェイト「……………ダメ？」

一護「うっ……………」

一護が止めさせようとするが、フェイトは上目遣い＋涙目を発動した。それも無意識で……………。それを見て一護は断れるはずもなく、

一護「……………勝手にしる。」

折れるしかなかった。それを聞いて安心したのか、フェイトはもの数秒でウトウトし始め、

フェイト「ありがとう……一護……」

その眩きを最後に眠りに就いた。だが対する一護は寝ることなどできない。一護は妹と何度か寝たことはあるがそれはもう何年も前の話だし、そもそも同い年の女子と一緒に寝たことなどない。さらにフェイトは十人中十人が美人と答えるであろうほどの美少女であり、彼女の胸囲は最早凶器に他ならない。結局一護が眠りに就いたのはその2時間後だった……。

## 現在

フェイトは昨夜の自分の行動を思い出し顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一護「……あいつらを呼んでくるか……」

固まっているフェイトを置いて当麻達を呼びにいこうとした時、

リクオ「おはよう、一護、フェイト。」

はやて「おはようやな。フェイトちゃん、一護君。」

フェイト「あ、おはよう、はやて、リクオ。」

一護「もう朝飯出来てるぞ。」

はやて「おっ、ホンマやね……って、フェイトちゃん、何で顔が赤いんや?」

フェイト「え／＼／＼!? な、何でもないよ／＼／＼!」

はやては見抜いた。絶対嘘であると……そして少し考え……

はやて（もしかしてフェイトちゃん……一護君のこと……）

早速真相にたどり着いた。と、ここで一護がリクオとはやてに尋ねる。

一護「そういや、当麻となのははどうした? まだ寝てんのか?」

するす、

はやて「ああ、2人ならもうすぐ来るで。」

リクオ「そ、そうだね。あははは……」

何故かリクオが苦笑いを浮かべた。と、そこへ、

なのは「お、おはよう、フェイトちゃん、一護君……」。

当麻「お、おはよう……い……ま……す……」。

どこかオドオドしているのはと何故か頭に大きなたんこぶができて  
いる当麻が現れた。

フェイト「えっと……2人は一体どうしたの？」

リクオ「……実は……」

く上条当麻の部屋く

リクオ「……ねえ……はやて……」

はやて「何や………」

リクオ「これ……どう思うっ………」

はやて「いや、どっつって言われても………」

ここは上条当麻の部屋。何故ここにリクオとはやてがいるかという  
と、当麻となのはを起こしに来たのだが、呼び鈴を鳴らしても全く  
反応がなく鍵も開いていたので仕方なく中に入ったのだ。そして現  
在リクオとはやてはある光景を目にしている。それは……

なのは「ん……ふにゅ………」

当麻に抱きつきながら幸せそうな顔で寝ているなのはと、

当麻「チーンッ

何故かボロボロで眠っている当麻の姿だった……。

はやて・リクオ（な、何があったんだろう……）

2人共目の前の状況に困惑するが、とりあえずなのはの方を先に起こすことにした。

はやて「なのはちゃん、起きてーな。もう朝やで。」

なのは「んん……あと半日……すう……すう……」

はやて「起きろ　　！……！」

なのはの寝言にはやてはどこからともなくハリセンを出して、

スパアアアンツ

なのは「ふにゃああああ！……？」

なのはをひっぱたいた。突然の衝撃になのはは猫のような悲鳴を上

げる。

はやて「何やねん半日って!?!? そこは“あと5分”やる!! 何やその斜め上に行くような寝言は!?!?」

なのは「は、はやてちゃん!?!? それにリクオ君も何でここにいるの!?!?」

リクオ「いや、当麻となのはが全く起きてこないし、鍵も開いていたらから入ってきたんだよ。それよりなのは……当麻は何でそんなにポロポロなの?」

なのは「ふえ? にやつ!?!? 当麻君何でポロポロなの!?!?」

はやて「知らないんかい!?!?」

リクオ「まあまあ、とりあえず起こしたほづがいいんじゃない?」

なのは「そ、そうだね…。当麻君、起きて。朝だよ。」

当麻「……んん……」





現在

リクオ「ってことがあったんだ……。」

一護「……………バカだろ、当麻……………」

当麻「……………不幸だ……………」

リクオ「ていうか、当麻はまずなのはに謝ったら？」

当麻「あ、ああ……………。ごめんな、なのは。」

なのは「ふえ／＼／＼／＼！？　べ、別にいいよ、当麻君／＼／＼。  
むしろ、ゴニョゴニョ……………／＼／＼。」

なのはは赤面しながら何か言葉を口にしますが、途中からごもごもと話していて周りには聞き取れなかった。

はやて（まさかなのはちゃん……当麻君のことを……ってことは全員私ら誰かに惚れてしもつたんか……まあ、それぞれ違う相手やから私らで取り合いにならなくて幸いやけどな。）

はやては1人、なのはの様子を見ていろいろと考えていた。

リクオ「はやて？ どうしたの？」

はやて「えっ／＼／＼！？ ああ、いや、何でもあらへんよ／＼／＼！」

「護」ところで当麻、何でお前はポロポロだったんだ？」

当麻「わかんねえ。ただなんか一瞬ピンク色の光が見えたかと思ったら意識が途絶えちまったんだよな……何でだ？」

それを聞いたはやてとフェイトは冷や汗が止まらなかった。ピンク色の光という言葉聞いて彼女達が連想するものは1つしかない。

フェイト（なのは……）

はやて（それはあかんやろ……ていつかそもそもどうやって当麻君だけポロポロにしたんや？……）

リクオ「まあ、とりあえず朝ごはん食べない？」

「護」…それもそうだな。」

その時、

ピリリリリッ！

当麻「ん？ 俺の携帯か。」

当麻はポケットから携帯を取出す。

ピッ。

当麻「もしもし。」

土御門『よー、上ちゃん！ あの人が上ちゃん達に会う都合が着いたに  
やー。』

当麻「そうか。ありがとうな、土御門。」

土御門『いってことじゃー。ああ、そうそう。そっちに遣いを送ったから、上やん以外はそいつにパッパッと連れていってもらうと良いぜい。そんじゃあ、また明日会おうぜい、上やん。』

当麻「ちよつと待て！？　今なんか変な単語が聞こえた気がしたんですが！？」

ツーツ、ツーツ

通話が切れてしまったため、当麻は仕方なく携帯をポケットに戻した。

一護「今の土御門からだよね？……って、どうした？」

当麻「ああ、いや何でもない……。で、あの人の都合がついたってさ。で、なんかここに遣いを送ったらしいんだが……。」

リクオ「遣い？　遣いって一体誰が……。」

と、そこに、

ヒュンッ

????「私よ。」

突然のことに全員が驚いた。当然のことである。どこからともなく部屋に1人の少女が現われたのだ。その少女は年齢は大体当麻達と同じくらいで赤い長髪を2つに分けている。そして服装は超ミニのスカートに加え、胸の部分だけを桃色の包帯のような物で隠し、その上にどこかのブレザーを羽織っているだけとかなり露出度の高い格好である。なのは、フェイト、はやてはいきなり人が現れたことへの驚きで口が塞がらないが、当麻達はそこには全く触れずその少女に話し掛ける。

当麻「結標<sup>むすじめ</sup>!?!」

一護「遣いっってお前かよ!?!」

結標「あら? 何か文句でもあるのかしら?」

当麻「いや、別にねえけどよ……………」

一護「お前が土御門のパシリみたいな真似をしてるのが意外なんだよ……。」

結標「……あなた達コンクリートブロックを頭にぶつけられたい？」

リクオ「お、落ち着いて！結標さん！ 当麻もリクオも変なことを言わないでよ！」

リクオがキレかかっている結標を落ち着かせる。

結標「……はあ……まあ、いいわ。で、そこにいる3人が土御門の言ってた人達なのかしら？」

結標はなのは達3人を見てそう尋ねるが、3人は未だに固まっている。すると、

一護「ああ、なのは、フェイト、はやて。こいつは俺達の友人で同じ学校の同級生の結標淡希だ。」

結標「まあ会うこともあまり無いかもしれないけど、よろしく頼むわ。」

なのは「あ、私高町なのはって言います。」

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです。」

はやて「八神はやてや。」

なのは「あの……淡希ちゃん……でいいかな？」

なのはの言葉に結標は思わず豆鉄砲を食らったような顔をした。

結標「あなた……よく初対面の相手に“ちゃん”付けなんかできるわね………まあいいわ。で、何かしら？」

なのは「えっと……さっきのは一体なんなんですか？」

結標「さっきの？」

はやて「いきなり現れたことや。何やあれ？ あんた何者や？」

結標「私は座標移動↑ウポイントつていう空間移動系の能力者よ。」



なのは「ムーヴ?」

フェイト「ポイント?」

はやて「それに空間移動系の能力者ってどういうことや?」

さっぱりわからないといった表情のなのは達を見て、結標は当麻達に尋ねる。

結標「あなた達、もしかしてこの3人に学園都市について何も話してないの?」

当麻「あっ……」

一護「そっいや、何も話してないな……」。

リクオ「まあ昨日はいろいろあったせいで、学園都市の話をするほど精神的に余裕がなかったからね。」

結標「……はあ……もういいわ。どうせその辺についてもあの年から話があるだろうし。とりあえず行きましょう。」

当麻「えっ！？まさか今からか！？まだ朝飯食ってないんだけど……」

結標「あの人が忙しいのはあなたがよく知ってるはずだけど？」

一護「当麻、あきらめろ。」

当麻「はあ……不幸だ……。」

結標「じゃあさっさと行くわよ。あ、ちなみに上条君は自力で来なさいよ。」

当麻「……はい？」

はやて「え？それってどついつ……」

だがはやてが言い切る前に当麻以外は全員部屋から消えた。そして……

なのは「にゃっ!?!?」

フェイト「きゃっ!?!?」

はやて「うひゃっ!?!?」

3人は一瞬浮遊感を感じたが急にそれが無くなり床に尻餅を付く形になった。

一護「お前ら、大丈夫か?」

リクオ「まあ初めてなら当然こうなるよね。」

なのは「うっっ、一体何が起こっ……た……の?……え?……」

フェイト「……」

はやて「一体どうなってるんや?……」

なのは達は困惑した。何故ならそこは先ほどまでいた一護の部屋ではなく、少し広めで洋風な装飾が施されたホールのような場所だっ

ただから。

リクオ「これが結標さんの能力、“座標移動”<sup>4↑ヴポイント</sup>、簡単に言うと物体を指定した場所に瞬間移動させる能力だよ。」

はやて「瞬間移動なんて……そんなことが有り得るんか……。」

???「それを可能にする人間がいるのが、ここ“学園都市”なんです。」

突如聞こえてきた声に驚き振り向くと、そこには一護達と同じくらいの年でベージュのスーツを着こなしている爽やかそうな少年がいた。

リクオ「久しぶりだね、海原君。」

海原「そうですね、奴良君。黒崎君もお久しぶりです。」

一護「お前、相変わらずその顔なんだな。」

海原「ええ。この顔は結構気に入っていますから。おっと、そうい

えはまだそちらの3人に自己紹介をしていませんでしたね。初めまして、僕は海原光貴と言います。まあ黒崎君達の知り合いとでも思っておいて下さい。」

なのは「あ、あの、私は……」

海原「ああ、あなた方の名前は既に知ってますよ。高町なのはさん、フェイト・T・ハラウンさん、八神はやてさん。」

フェイト「え？ どうして？……」

海原「ああ、土御門から聞いていますから。彼と僕、そしてそこにいる結標さんとは一種のビジネス仲間のような者でしてね。」

はやて「そ、そうなんか……」

なのは達は思った。“この人とはなんか話しづらい”と……。

結標「さて、紹介も済んだんだからさっさとあの人のところに案内した方がいいんじゃないかしら？」

海原「そうですね。では皆さん、僕に付いてきて下さい。」

そう言っつて海原が行こうとした時、なのはが気付いた。

なのは「ねえ、当麻君は？」

フェイト「あれ？ いない？」

はやて「何やて！？」

一護「ああ、別に気にしなくていいぞ。」

なのは「？ どうして？」

リクオ「いや、当麻は無理なんだよ。」

フェイト「何が？」

一護「あいつにはムーヴポイントが…というか能力自体が効かないんだよ。」

はやて「な！？　じゃあ1人だけ置いてきぼりにしてきたんかいな  
！？」

海原「大丈夫ですよ。しばらくすれば彼も着くでしょうから。では  
こちらへ。」

そう言つて海原は先導し始め、一護やリクオ、結標もそれに付いて  
いく。なのはやフェイト、はやてはイマイチ納得のいかないまま、  
それに付いていった。長い廊下に出てひたすら進んでいくと、突き  
当たりに立派な両扉があつた。

コンコンッ

????「どうぞ。」

海原「失礼します。」

海原がドアをノックすると中から年配の女性の声が聞こえてきた。  
そして許しを受け、海原がドアを開け中に入り、それに一護達も続  
いて入っていく。

海原「上条君以外の5人を連れてきました。」

「……」苦勞様でした。結標さん、海原君。」

100人は入れるのではないかというほどの広い部屋にある高級そうな執務机には1人の、見た目どこにでもいそうな初老の女性が座っていた。すると、

「……」久しぶりですね。黒崎一護君、奴良リクオ君。」

一護「あんたも相変わらずみたいだな。」

「……」あなた達も元気そうですね。それと進級おめでとうござい  
ます。もう高校2年でしたか？」

リクオ「はい。まあ、当麻は進級できるか微妙でしたけど、何とか  
進級できました。」

「……」ふふ、彼らしいですね……。さて、その上条当麻君はいま  
せんが話を始めても大丈夫でしょう。その前にそこにいるあなた方  
3人に自己紹介をしなければなりませんね……。」

すると、初老の女性はなのは達の方を見た。そして……



???。「初めまして、高町なのはさん、フェイト・T・ハラオウンさん、八神はやてさん。私は学園都市を統括する最高機関“統括理事会”の理事長を務めている親船おやふねもなか最中といたします。」

END

忙しい人の都合の良い日はめったにない！（後書き）

どうも、黒狼です。

とりあえずすみません！ 話が全然進みませんでした。前半部分に力過ぎすぎた結果です。本当はさっさと話を進めたかったんですが、そうするとシリアスのみになってしまいそうで……。一応これギヤグ&ほのぼのがメインと謳ってるのでそれはまずいと思って書いたのですが、グダグダに拍車がかかりました、はい……………。

さて今回はまさかのグループのお二方を出しました。海原はどうしようかと思ったんですけど、出さないのもかわいそうだなと思って出演させました。あ、あの白い人は当然いずれ出ますよ。禁書目録であの人が出ないとか無いですからね。

そして“あの人”の正体は統括理事会きつての善人、親船最中さんでした。あと理事長が親船さんということに気付いた方も多いと思います。アレイスターさんは出ない方向で行くと思います。アレイスターさんが理事長だとキャラ崩壊でもさせない限り、なんかシリアス方面にしか行かなそうなので……。

めちゃくちゃ長くなってしまいました。すみません。

ではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4987x/>

---

自由学園～少年少女の青春録～

2011年10月21日10時02分発行